



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑報. 地球 1924, 1(6): 508-515

ISSUE DATE:

1924-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182672>

RIGHT:

雜 報

◎新疆省の油田 マルコニー無線電信會社技師ドックレー少佐は近頃チャイナ・プレス紙上に『新疆省は世界最大の油田である、迪化より溫宿に至る數千哩の地域は悉く油田地であつて之が裏海のバクー油田まで延長連續して居る』と掲げて居るさうであるが、石油時報に據ると同油田の狀況は次の如くである、新疆省の油田は今日發見されたもので無く、同省内に豊富なる油田賦存すべしとは夙に傳へられた所である。甘肅省嘉峪關を出で瀚海の盆地に入り安西を過ぎ北西に才壁沙漠を斜行すれば新疆省天山南路の吐魯番といふ都市に行く。猶此地より天山々脈を北西に越えると天山北路の迪化に達する。迪化より西南西に向ひ溫宿に至る油田中既知の箇所は獨山子、旗桿溝、將軍溝、四顆樹溝、博羅通古、紅溝、卡子灣、頭屯河等で就中獨山

子油礦の如きは曩に光緒三十三年新疆商務局に於て採油し、露國にて油質を試驗して精良なることを認めたもので、宣統元年に露國より機械を求め七八丈掘鑿したるに、井内波濤の如く油氣蒸騰したと云ふ。かく新疆省に豊富な油礦の存在することは疑ひ無いやうであるが、其の地は僻遠にして交通の不便なことは言語に絶え、支那内地より此地に赴くには鐵道は僅に陝西省の西安迄通するのみで、それより甘肅を經走して行かねばならない。西方トルキスタンの方面からはアンヂャン迄鐵道の便あるみで、之より新疆に入るには天山々脈を踏破せねばならぬ。此の邊境の地に怎うして鑿井用機械を搬入すべきか。又出油するにしても石油を如何なる方法で何處の地點に搬出すべきか。新疆の石油は豊富なりとするも掘鑿の實施には多大の困難があると言はねばならない。

○華僑の現状 華僑とは在外支那人に與へられた名稱であつて廣義には既に外國の國籍に入つたものをも加へてゐる。『太陽の照臨する處英

國の國旗の翻らざるはなく海水の及ぶ處支那僑民を見ざるはなし』と或人の言つた如く殆んど世界各地に行きわたつてゐる、最近の調査によると華僑の總數九百三十二萬餘其中印度支那南洋方面が最も多くて三百四十八萬餘、臺灣に二百五十萬餘、南北亞米利加を通じて三十二萬などが殊に著しい、就中暹羅、海峽植民地、緬甸、爪哇、スマトラ等に於ては其の勢力頗る強く、護謨園労働者、甘蔗畑働き、開墾人夫、鑛夫等は勿論水夫、車夫、洗濯業等あらゆる勞役に從ふ者が大部分を占め、資本家としては雜貨商、米屋、呉服屋、砂糖商、護謨業、珈琲業、汽船業、銀行業等を營み大なる勢力を占めてゐるものが少くない、是等移民は江蘇、浙江、福建、廣東、山東等の瀕海地の出身者が多く香港、汕頭、海口、芝罘、龍口などが其の出口である、華僑は既に數百年以前から渡航し其の地に土着して數十代を経過したものから極めて最近に移住した新しいものまで種々あるが大體から見れば居住の年限の比較的舊いものを僑生と呼び之に對して

新渡のものを新客と稱してゐるが成功者は前者に多いのは勿論である。支那の各港は年々多額の輸入超過を示してゐるに拘らず金融市場に大した變動のないのは此華僑の本國への送金が多いからである、南洋華僑の送金は約一億弗で米國華僑のそれは約千五百萬弗と稱せられ其他の諸國の送金全部を合すると實に支那政府の歳入の三分の一にも達する程である。支那労働者の忍耐和平的なのは世界に定評があつて近世の交通産業の發展と大關係がある、加奈陀太平洋鐵道、米國の大北鐵道の建設さてはカリフォルニア金鑛の開掘は大半支那労働者の力である、西比利亞鐵道東部の橋梁トンネル等は全く山東苦力の手で出来、パナマ運河の開鑿に當つても支那苦力がよく酷熱に耐えて仕事をした、馬來半島や南洋の開拓は一に華僑の賜である、支那商の地位は左まで重大ならざるも若し南洋方面より支那商を一掃したならば再び荒涼未開の舊狀に立ち返るであらう(東方雜誌二〇ノ二六抄録)

○奉天地方の米作 奉天地方は從來支那人間に

陸稻栽培行はれしも、水田耕作は皆無にして、在住邦人の食糧米は、安東及朝鮮方面より供給を仰ぎしが、明治四十五年頃より内地人又は朝鮮人によりて各地に小規模の水田開墾せられ、又支那人中にも之を倣ひ水稻の栽培を爲す者あり、明治四十三年水稻子と稱して初めて市場に現れたるも、珍奇なるものとして注意を惹きたるに過ぎず、其收獲僅少にして粳子（陸稻）同様に取扱はれつゝありたり。其後移住鮮人の數増加すると共に、是等鮮人によりて到處水田の開墾を見るに至り、邦人中又多大の資本を投じて水田經營に従事する者鮮からず、逐年増加發展し來り、大倉組東亞勸業等の諸會社亦大規模に水田を計畫し、著々進捗を見、將來益々有望視せられ、一般に之が研究調査を進めつゝあり。以上の如く水田の發達擴張と共に滿洲各地の水田米產額増加し、從來供給を受けつゝありし安東米は、兩三年以來其需要減退し、僅に水路を利用して大連旅順の二市場に供給するの一途のみとなり、尙冬期結氷中は水運不可能の爲、新穀の出

廻期より翌春解氷期迄は殆ど販路を有せざるに至れり。是滿州米穀取引上の一大變化にして最近安東米は常に沿線各地（奉天撫順鐵嶺開原等）より大連に送付する米價を標準とし其以下の値段を以て大連に到着せしむべく努力しつゝあり更に滿鐵沿線各地の狀態を見るに、奉天、撫順鐵嶺は殆ど對立の地位にあり、開原は其品質に於て前記三者に一步を譲るものゝ如く、特に近年異狀の發達を見たるは松樹驛（牛莊管内）の粳出廻狀態なり、從來安東は鴨綠江下流西岸地方より岫巖附近に産する水田粳を總て吸收し、滿州米の牛耳を執りたるものなりしが、販路減退の結果、自然的に仕入値、下押となりて商況不活潑となり、地方農民を失望せしめ其機に乗じて偶々松樹驛に粳の搬出を爲したる者ありしに其賣行旺盛に價格亦安東の比に非ざりしより、同地に粳を搬出する者漸次増加して遂に今日の繁榮を見るに至れり。現在滿州米穀の中心は奉天に在りと雖も、其實際は撫順鐵嶺の兩地を連合して其實力を發揮し得るものゝ如し、今大正

十一年及十二年度の收穫を概記すれば左の如し  
但し昨年は八月中の大降雨の爲水田の流失した  
るもの其他の被害にて平年作の七割弱に止れり

區別		大正十一年度 <sup>千石</sup>	大正十二年度 <sup>千石</sup>
北部	開原長春地方	三九三・〇	四〇〇・〇
中部	鐵嶺奉天撫順地方	三三〇・五	四三〇・〇
南部	遼陽營口松樹地方	一八三・〇	二〇〇・〇
東部	鳳凰城安東地方	二四七・五	二〇〇・〇
西部	蒙古地方	四〇〇・〇	二〇〇・〇
合計		一、二三四・〇	一、三三〇・〇

但大正十二年度は水田面積増加のために産額多し。

○カボツク綿 本草綱目に木綿樹とあるもの一名ばんや、熱帯に産する常緑喬木にして高さ凡そ百尺に達す、若き莖に刺あり、葉は掌狀複葉にして五箇の小葉よりなる、花は帶黃白色にして長形の果實を結ぶ、種子は白色の長軟毛を有す、これ即木綿なり、木材は甚だ輕くして丸木舟を作くるに適す、東半球の熱帶地方を通じて遍く繁茂せる植物にして、其形態の特色は南洋地方の旅行者の目を惹く所なるが比律賓にては、

庭園の一隅或は雜林中にて容易に見出さる、其特色とは其幹眞直にして且長く枝葉は極めて規則的間隔を以て水平に突出し、乾期にありては其葉は凋み其間に幾多の莢を抱擁するものとす莢中の白毛即木綿をカボツクミ云ひ土人の枕、蒲團、蓆等の充填物として使用せる歴史は古し。一六九二、蘭人ヤコブボンチアス、バタビアに居住せし際この植物について初めて記述したりしが、其の纖維が一種の綿として商業的價值を現はすに至りしは全く最近の事に屬し、一八五〇年爪哇在住の和蘭人が極めて少量のカボツク纖維を和蘭本國に輸出して好評を博したるを以て嚆矢とし、次で濠洲及米國等に仕向けたるが更に評判宜しく漸次受用せらるゝに至り、現今にては世界的物産の一として爪哇は其主要産地たるに至れり。

比島農務局がカボツク栽培の有利なるを知り之が隆盛を期したるは一九〇三年の頃にして、其後調査研究獎勵を加へ、一九〇五年には輸出品として比律賓の記録に上るに至れり、但し當時

は僅に四噸六百十四ペソの價格に止まりしも、大正十一年には價格一一九、五三六ペソの輸出ありて漸次増加の勢を示す、この中本邦への仕向けも最近に一三、〇三九ペソに達し、日比貿易品の重要輸出品となれり、この纖維は棉花と異りて光澤強く極めて彈力性を有し、改良蒲團入綿として尤も妙なるが如く、家具用に適す、猶最近は絹の如き美麗にして平滑なる糸に紡ぎうるに至りたるを以て其前途を期待せらる京阪地方の工業家にしてカボック棉に加工しつゝあるものあり。(藤田)

○生絲の價格　ゼ、ハワード、エコノミック。

サーヴィスは、最近生絲の價格及經濟循環なる調査を發表したるが、右に依れば日本生絲一番の戦前平均價格は一封度三弗八十仙なり、然るに戦後は七弗九十仙にして十割以上の騰貴なり戦前の一年平均最低價格は一九一二年の三弗四十五仙にして最高は一九〇七年の五弗六十四仙なり。戦後は年平均最低一九二一年の六弗五仙最高一九一九年八弗八十六仙なり。一九二〇年

以來生絲價格の變動は弗價を標準とするときは戦前に比し稍々大なるも率に於ては戦前程大ならず、戦前十七年間の平均三弗八十仙は大體に於て日本製絲家の收得八百七拾圓繭の四十二掛に當る、戦後五年間の平均七弗九十仙は製絲家に對し一「ペール」千九百八拾圓繭の百五掛に當る、同時に日本は若し今後生絲取引の減退を防止せんとするならば其價格を戦前の方向に漸次引下ぐる必要を生ずべしと附加せり。新繭期節も接近せる今日、製絲家は右事情に鑑み、繭に對し餘りに高價を支拂ふ事を避け、米國機業家をして大なる活況を呈せしめ得る程度の價格を以て生絲を提供するを得策とすべし。

○江西省の油脂類　江西省は土地肥沃にして氣候亦山茶花、菜種、櫨木等の栽培に適するを以て此等種子より搾取する植物油及各種動物油の産額は他省に比して比較的多く就中菜油、香油、及皮油、の産額は支那全國に冠たり。

茶油　本品は所謂茶山花の實を壓搾し製するものにして產地は宜春、萬安、義寧、武寧、分宜、

廣信、永豐、贛州九江諸縣等各地に亘り宜春一縣のみにても年々價格十萬元以上を產出すと云ふ、其他分宜縣五萬擔萬安縣三萬擔を產出するも地方民に食用として大部分使用せられ輸出せらるゝ物は左程多からず。

猪油 は其產額贛州を第一とし宜春、南昌縣等之につぐ其製法を見るに豚の脂肪分を二三寸位の大きさに切り約一時間大釜にて煮沸し、溶解して黄色の油狀を呈するに至れば、之を搾油器に入れ其油のみを取り之を盆の如き器物に入れ冷却す用途は食用を主とす。

菜油 は產額鄱陽縣を第一とし一縣のみにて年額四十萬町に上ると云ふ其他瑞昌縣永修縣等有名なり、當地支那人が料理に使用するは主として此菜油にして其輸出額は、大正九年度には支那全國諸省中第一位を占め同十年及十一年の兩年度は上海に亞で第二位を占めたり。

麻油 本品は所謂胡麻油にして省内一帶に白胡麻黑胡麻の產額多く製油額亦少からざるも大部分食料として地方民に使用せられ輸出せらるゝ

は少し。

桐油 江西省は湖南河南の如く未だ桐樹の栽培隆盛ならず從て桐油の產額も多からず當地の支那兩縣及民船家具等の染料は主として本品を用ふ。

香油 本品は肉桂樹其他大茴香等の葉より取りたる油を更に精製したるものにして大正九年度は其輸出額支那諸貿易港中數量第一位價格第二位、大正十年度は數量第四位價格第三位を占め更に大正十一年度は數量第一位六、六五五擔價格一六二、二二六兩に上れり。

牛油 本品は牛の脂肪より製したるものにして主として冬期に製す、是夏期は牛の脂肪少く冬期に多き爲なり、省内各地に産し支那蠟燭製造に使用す。

皮油 本品は櫨の實を絞て製するものにして建昌瑞昌永修諸縣に産し支那蠟燭及油紙製造に使用せらる、其輸出額大正十一年度漢口に亞で第二位を占め凡一萬擔價格十五萬兩を超過せりといふ。

以上の油脂脂肪類を輸出する商店は多く九江大碼頭にあり。

○滿鐵の頁岩製油 滿鐵經營に係る撫順炭礦から採取する油母頁岩の埋藏量は百五十億噸と云はれ露天掘炭層の上部のみにても五億乃至十億噸に達し之を蘇格蘭式低溫乾餾爐にかける時は油母頁岩一噸につき重油二〇乃至六〇ガロン硫酸アンモニア十キロを産出し得べく滿鐵は第一期計畫として一日二千噸の礦石を破碎し年額二百萬石の製油を開始する筈である、副産物としては硫酸アンモニアの外に砂を生ずるが砂は撫順炭礦内掘廢坑の充填物として利用する筈で非常有利な採算となる。

### ○鐵道開通、三、項

和歌山箕島間鐵道開通 鐵道省では二月二十八日より紀勢西線和歌山箕島間十六哩の鐵道運轉營業を開始した。

須崎日下間鐵道開通 高知縣須崎町から日下村に至る約十五哩間の鐵道が三月三十日から開通した。高知縣では最初の鐵道である。

美禰線開通 瀬戸内海岸と日本海岸とを厚狹正明市間二十七哩の最短距離で結ぶ美禰線は三月二十三日開通した。元來山口縣の北海岸は交通機關に恵まれず物資の需給は海路下關に廻るか中國山脈を越えて鐵道沿線に出るかを餘義なくされ仙崎を中心とする天與の水産を抱いて不遇であつたが此の線の開通と共に益々開發されるであらう。

### ○文檢地理科豫備試驗問題(第四十回 大正十三年五月施行)

- (一) 琉球列島の自然地理を述べよ。
- (二) シヤム國の人文地理を述べよ。
- (三) 太平洋の主要なる海流につきて述べよ。
- (四) 地形の「若返り」Rejuvenationとは何ぞや實例を挙げこれを説明せよ。
- (五) ロシヤ國の聯邦組織を説明せよ。
- (六) 季節風帶地方に於ける産業の特色につきて説明せよ。
- (七) 左の地及び諸項につきて知る所を記せ。

イ、閩江

ロ、トランスヨルダニヤ Transjordan



ハ、エリー運河 Erie Canal

ニ、バルト海に注げる河流五つ。

ホ、北アメリカ大陸の西半を横断せる主要なる鐵道線路と其の終點

ハ、アフリカ大地溝帯に沿へる湖水。

(一)・(二)・(三)・(四)・(七)の諸問には地圖又は圖式等を附してこれに答へよ。

右 四時間

◎故神保博士の歐文著述目録

1. Explanatory text to the geological map of Hokkaidō. 53 p. *Sapporo*, 1890.
2. General geological sketch of Hokkaidō with special reference to the petrography. 79 p. *Sapporo*, 1892
3. Beiträge zur Kenntniss der Fauna der Kreideformation von Hokkaidō. *Palaeontologische Abhandlungen* Bd. VI. (*Neue Folge* Bd. II) pp. 149-194. *Jena*, 1894.
4. Notes on the minerals of Japan. *Journal of the College of Science, Imp. Univ., Tokyo*. Vol. XI, pp. 213-281. *Tokyo*, 1899.
5. Danburite of Obira, Bungo Province. *Beiträge zur Mineralogie von Japan*, Nr. 1, pp. 1-10. 1905.
6. Siliceous oolite of Tateyama, Echū Province. *do*. pp. 11-15. 1905.
7. Crystallization of calcite from Mizusawa and Furokura, *do*. pp. 26-29. 1906.
8. General note on Japanese meteorites. *do* pp. 30-52. 1906.
9. On some zeolites found in Japan. *do*. Nr. 3, pp. 113-120. 1907.
10. Preliminary notes on the geology of Japanese Sakhalin. *Transactions of the Sapporo Natural History Society*. Vol. II. pp. 1-25. 1908.
11. Ferberite from Kurasawa in the Province of Kai, and Huebnerite from Nishizawa in the Province of Shinotsuke. *Beiträge zur Mineralogie von Japan*. Nr. 5, pp. 256-259. 1915.